



加藤 元の



と暮らして
みませんか

27

今回は、子供たちと犬とのあいさつの仕方についてお話ししましょう。

「三つ子の魂百まで」と言われるように、子供が十歳になるまでは、脳の発達にとって極めて大切な時期で、「感受性期」と呼ばれています。これは他の犬や猫などのほ乳動物についても基本的に同じです。子供たちは自分の周りの動物や自然とのふれあいを通じ、命の大切さを自然と身に付けていきます。感性や個性が育ち、自と他を知り、自尊心を育てます。

また、思いやりの心や弱者をかわばう正義感、生きていく中で守らなければならないルールなどを体得し、主体性を自分のものにして

犬とのあいさつ

感性育てる「ふれあい」の一步

いくことができるのです。ですから、子供たちが生き物に触れるのはとても大切なことなのです。

ふれあいの第一歩は、人間でも犬や猫でも、あいさつから始まります。飼い主が引き綱を持つ犬に子供が出合ったら、犬に近づく前に、飼い主の目を見て「こんにちは、犬に触ってもいいですか」と尋ねさせます。飼い主に「いいですよ」と言われたら、ゆっくり近寄って座り、手を伸ばして手のひらを軽く握り、手の甲を犬に見せます。犬から近寄ってきて手をかいたり、親しそうな態度を見せたら初めて触ります。

犬をなでる一番良い場所は、下アゴの周辺が胸です。そこに手がきても、犬は良く見えるからです。犬が怖がっていたり、怒っているように見えたら触らないことです。もしも、知らない、放たれている犬に出合ったら、犬の目を見ないこと。そして、逃げたり声を出さないで、電柱や木のようにじっとして動かないようにしましょう。

子供たちと犬を仲良くさせるためには、大人が子供と犬をよく観察し、犬の気持ちを子供によく教えてあげることです。また、子供たちに無理に触らせてはいけません。触りたくなるまで待ちましょう。

(ダクタリ動物病院広尾病院院長、
日本ヒューマン・アニマル・ボンド、
ソサエティ会長)

《産経新聞2004年10月10日掲載》